究極の母性愛･･･子グモに身を捧げるカバキコマチグモ

カバキコマチグモは、平地から山地の草原や河原、水田、池や沼などに広く生息し、昼間はススキの葉を巻いて中に潜み、夜間活動して昆虫などを捕らえる（ネイチャーガイド日本のクモ. 文一総合出版）。

メスはチマキ型の巣の中で産卵して卵を保護するが、孵化した子グモは母グモを食べて育つ。

卵を保護中のクモは攻撃性が高く、巣を開くと攻撃してくる。カバキコマチグモの牙は大きく、その毒性（LD50：実験動物を半数死亡させる量で表す）は世界有数の強さ、日本に住む動物の中では最強で、セアカゴケグモの100倍以上だという（猛毒動物最恐50, サイエンス･アイ新書）。毒の量は少ないため、死亡事故はおきていないが、咬まれた場合には医療機関にかかるなどの対応が必要である。

巣を守るメス：強大な牙で噛みつこうとする
噛まれると、スズメバチに刺されたような
強烈な痛みが続く
（抗ヒスタミン軟膏が有効）

ススキやヨシの葉を巻いて作った子育て用の巣
草原の中でもよく目立つ

巣の中のメス
腹部が大きく、産卵直前と思われる

卵のうを守る母グモ

子グモは巣立ち、親グモの殻だけが残った